

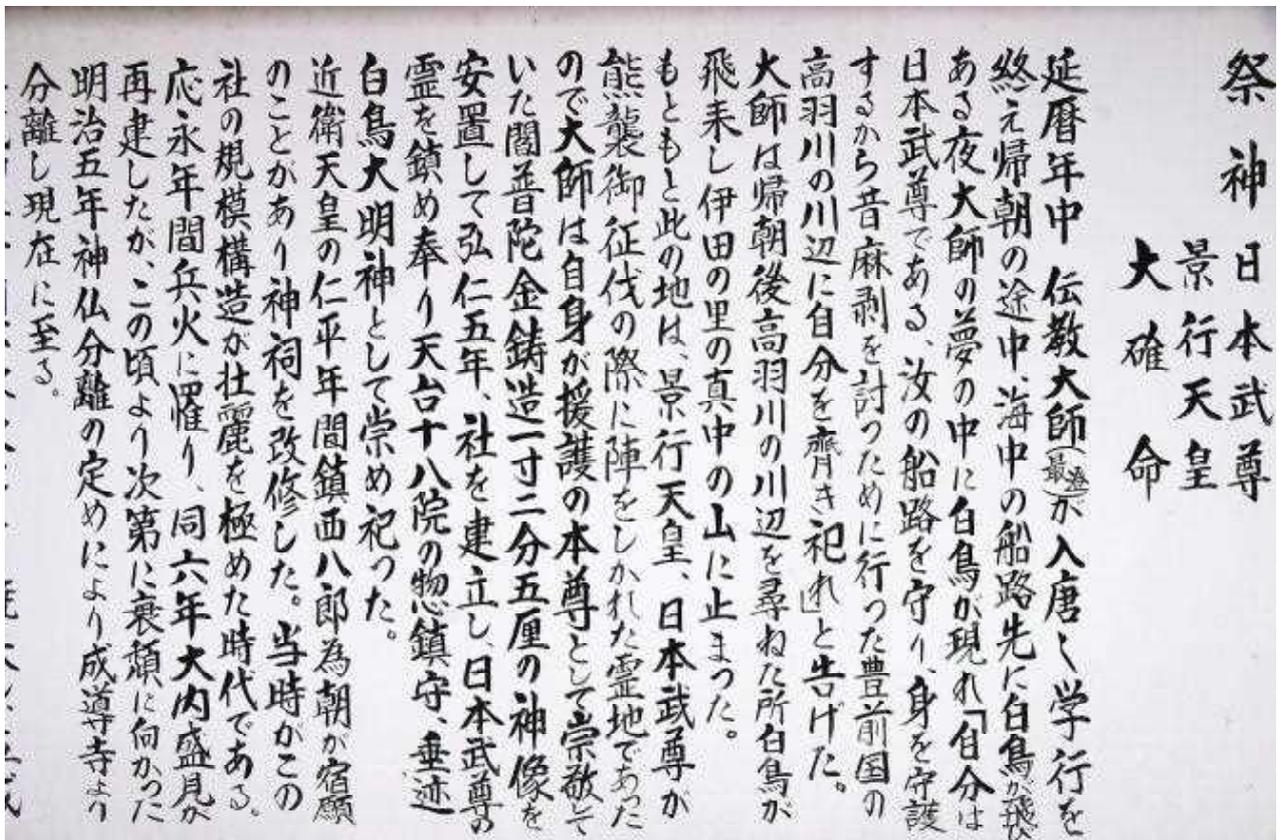
九州天皇家論 6章 倭建の歌

赤い満月

高羽 (田川) の白鳥神社

田川市は、古代、「高羽」と呼ばれていた。景行天皇と倭建が本陣を構えたと伝わる丘が田川市・伊田の白鳥神社である。神社の由来にはつぎのような趣旨が書かれている。

最澄が帰路の途中、夢に「日本武尊」が現れ、「自分は日本武尊である。汝の船路を守り、身を守護するから、昔麻剥を討つために行った豊前國の高羽川の川辺に自分を齋き祀れ」と告げます。最澄は帰国後「高羽川」を訪ねた時、白鳥が飛来して、「真中の山」にとまった。そこが「田川市・伊田」だったのです。そしてそこは「景行」「倭建」が熊襲成敗に向かった時に陣をしいた靈地であったというのです。



ここに景行天皇の出陣の本陣があった。その理由はこの地が九州天皇家の都だったからである。景行天皇も倭建もこの地に住み、ここから遠征に出かけた。どこか他の所からここへ来て、本陣を構え出発したのではない。ここが景行天皇の國であった。



白鳥神社のいわれは、視点をかえれば、悲しい現状批判である。また、穿っていえば、厳しい現政権批判である。倭建は自分を初めとして、九州に存在した天皇家の陵墓が正当に祀られていない現況を批判した。これが夢にまで現れて告げた倭建の言葉の眞の意味であろう。九州天皇家の天皇陵を正当に護ろうとしない現政権を批判した。そして、せめて自分を故郷の「高羽(田川)」に祀れと願ったのであろう。

最澄の時代には天皇家は近畿天皇家の時代である。九州天皇家の故地は荒れ果てていた。倭建の魂は嘆いたことであろう。

…コレデハ、

妾(あれ)、御子に易(かわ)りて海の中に入らむ。御子は遣はさえし政(まつりごと)を遂げて覆奏したまふべし

ト、入水シテ死ンデイツタ弟橘比賣ハ浮カバレマイ。

…コレデハ、三重村デ、

吾が足は三重の勾(まがり)の如くして甚(いと)疲れたり

ト、イウマデ疲労シ、能煩野マデ来テ、望郷ノ念耐エ難ク、倭ヲ偲ビ

倭(夜麻登)は 國のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる 倭しうるわし

愛(は)しけしや 吾家(わぎへ)の方よ 雲居起(た)ち来も

ト、詠イ、

嬢子の 床の邊に 我が置きし つるぎの太刀 その太刀はや

ト、故郷ノ妻ヲ案ジ、妻ノタメニ置イテキタ草薙ノ太刀ヲ氣ニシツツ、旅ノ途上デ、命ノ尽キタ我が身ガカワイソウデハナイカ。

九州天皇家のために命を捨てた倭建は死んでも死にきれなかったのであろう。夢に現れて、九州天皇家の陵墓の復興を願ったのである。思えば、悲しい話である。本来の自分の陵墓が祀られることもなく、他人の陵墓が自分の陵墓として祀られているとは！無念であったであろう。しかし、最澄の時代は、まだ、「天の香具山」は健在だった。九州天皇家を見守っていた。だが、現在の姿はどうだ。無惨である。倭建が、再び、その哀しみを夢で伝えるほどの人物はいないのだろうか。

田川市では毎年五月、白鳥神社と風治神社の「川渡り神幸祭り」が行われ、御輿が彦山川を渡る。白鳥神社の御輿の渡川は、倭建が飛び立ち、河内に向かったというイメージが込められているようである。地元の人々はこのようにして倭建の霊を慰めてきたのであろう。



北九州 添田町」の伝承（「HP・そえだまちの遺跡・史跡」）

「緑川」

彦山川上流の深倉川のあたりに鼻垂彦と耳垂彦という者が住んでいて、大きな勢力を持ち、大和の朝廷に逆らっていた。景行天皇は、熊襲をはじめとする九州の勢力をおさえるために、田川にやって来て鼻垂彦・耳垂彦の軍を破った。そのとき、今の深倉川は血に染まり、血みどろ川と呼ばれるようになった。後世になって「みどろ」が緑に転訛して緑川の名になったという。

別の話がある。景行天皇の皇子日本武尊の軍勢が、彦山川の上流に勢力をはる土折居折の軍を破って、血みどろ川と呼ばれるようになったという。土折居折が日本武尊から討たれたという話は田川市猪膝にもあり、土折居折を切った太刀を洗ったという太刀洗の井戸が、町の出入口の道路そばにある。

ちなみに、「日本書紀」の景行天皇と田川（高羽）に関する部分を、読みやすく書き直すと次のようである。

景行天皇の十二年の七月、熊襲が反乱をおこしたので、自らの軍勢を率いて九州に向けて出発した。九月一日周防国の娑摩という所に着いたとき、南の方に煙が多くあがっているのを見て天皇は、賊が居るに違いないと、多臣の祖武諸木、国前臣の祖菟名出、物部臣の祖夏花に状況を調べさせた。

報告にいうには、豊国の首長の神夏磯媛という女性が天皇が来ることを聞き、サカキを根から引きぬき（英彦山神宮神幸祭にこの形のさきがか使われる。）、その上の枝に八握剣、中の枝には八咫鏡、下の枝には大きな美しい玉を掛け、それを船の舳先に立ててやってくるというのであった。媛が天皇の前に出ていうには、私たちに天皇にそむく気持ちはまったくありません。しかし、悪い賊が四人います。一人は、鼻垂といって、菟狭の川上にいて君主の名を勝手に使っています。二人目は耳垂といって、御木の川上にいて人びとを苦しめています。三人目は麻剥といって、高羽の川上におり、こっそり徒党を集めています。四人目は土折居折といい、緑野の川上にかくれていて人びとをさらっています。この四人とも、それぞれ要害の地にいて人びとを支配し、天皇の命令には従わないといっています。速やかに討ちとって下さいということである。

天皇はまず、麻剥の一党を誘い出し、赤い上着や袴や珍しい品物を与えて他の三人を呼ばせた。すると他の三人も家来を従えてやって来た。武諸木らはこれらを捕えて殺してしまった。やがて天皇は九州にやって来て、豊前国の長峽県に来て行宮をたてた。そこを京と叫んだ。今の京都郡というのである。

< www.town.soeda.fukuoka.jp >

H・Pは奈良・大和発の物語となっている。しかし、景行天皇と倭建は高羽(田川市)の天皇である。景行天皇、倭建は九州天皇家の天皇である。添田町のH・Pでは賊について、「鼻垂(はなたり)」、「耳垂(みみたり)」、「麻剥(あさはぎ)」、「土折居折(つちおりいおり)」の四人を挙げている。日本書紀に同じ説話がある。

三をば麻剥(あさはぎ)と曰ふ。潜(ひそか)徒黨を聚めて、高羽の川上に居り。

(日本書紀・景行天皇)

日本書紀の記述は白鳥神社の由緒と同じである。倭建が討った「熊襲」とは「高羽川」、つまり、英彦山川の上流の「熊襲國」で、現在の添田町である。

